

南京・海南島・上海への旅



神戸・南京をむすぶ会フィールドワーク 2011 夏

飛田雄一

わたしがこども中国にでかけたわけ

今夏、中国にでかけた。神戸・南京をむすぶ会の第15回目の訪中団のメンバーとして南京、海南島、上海を訪問した。南京3泊、海南島3泊、上海1泊の旅だ。ゆっくりとした旅とは言えないが、それぞれに充実した旅だった。

この神戸・南京をむすぶ会は、1997年に第1回目の訪中をしている。第1回は、南京と淮南を訪問している。淮南は、パールバック『大地』の舞台だ。メンバーが地平線まで続く大豆畑に感動して、長い間眺めていたら現地ガイドが、なにが面白いのかというような風に呆れていたことを思い出す。

神戸・南京をむすぶ会は、1996年ゴールデンウィークの期間に神戸王子ギャラリーで開催した「丸木位里・俊とニューヨークの中国人画家たちが描いた南京1937絵画展」がきっかけに生まれた。その絵画展のボランティアが一度は南京を訪問しようと、一回だけの旅行団として結成され、1997年8月に最初の訪中をしたのである。



揚子江沿いの南京燕子磯の南京大虐殺記念碑で。(中国では「紀念」の漢字を使うことが多い。南京の記念館の名称も「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」だ。本文では、基本的に固有名詞のときにはそのまま「紀念」を使用することにする。)

それが今年も今年もと続き、今夏の訪中が15回目

となったのである。毎年、南京大虐殺の現場南京ともう1ヶ所日本軍が侵略した場所を訪問することになっている。この間の訪問先は、以下のとおりである。

98年、南京・撫順、99年、南京・太原・大同・北京、00年、南京・ハルビン、01年、南京・蘇州・杭州、02年、南京・重慶、03年はSARSの関係で訪中できなかったが、04年、南京、大連、旅順、05年、南京・済南・青島、06年、南京・無錫・石家荘・天津、07年には8月に南京・武漢、そして同年12月には記念館リニューアルオープンにあわせての南京訪問、08年は、南京・瀋陽・長春、09年は南京、牡丹江、虎頭、虎林、昨年(10年)は、南京と延辺朝鮮族自治州をたずね、有名な朝鮮の詩人・尹東柱の生家などを訪問した。(延辺については本通信242号、2010.9参照)

毎年15~25名が参加する。一昨年からは大学生特別枠をもうけ、普通なら20万円程度かかる費用を特価5万円で参加できるようにしている。だいたいおじさん、おばさんが中心のツアーだが、大学生もそれなりになじんで参加してくれている。一般的に市民グループが主催するツアーは、時には最少催行人数に満たなくて苦勞することがあるようだが、このツアーは常連ないし複数回参加のメンバーが半数ほどいて、これまで成立しなかったことがない。南京以外のもう一ヶ所について、「来年は***へ行きたい」という話が早くも報告集会ぐらいから話題となり、新年会で決定するというパターンがつづいている。この「もう一ヶ所」がツアー継続の理由のようだ。

(右)南京・前駐外使節
九烈士墓





このような「報恩塔」が建てられていた

南京では1回目からの神戸・南京をむすぶ会専属ガイド・戴國偉さんがいて毎回周到な準備をしてくれる。毎回新しい参加がいるので定番といわれている南京大虐殺の大量虐殺現場は必ず訪問するが、それ以外に新しい場所を探してくれている。これまで南京神社の場所を探し当ててくれたり、A戦犯・谷寿夫を裁いた旧法廷のあるホテルに宿泊したり、草に埋もれた記念碑を探し出してくれたりした。2008年には、従軍看護婦として1944年から2年間南京で働き遠足のときに人骨を多く見つけてそのことを長く心にしまっていた上田政子さんが参加することを告げると、事前に日本軍の南京陸軍病院の調査をして訪問のときに現地を案内してくれたこともある。上田さんには62年ぶりの南京訪問で、その遠足の現場は確認できなかったが、当時の陸軍病院跡などを感慨深く訪問された。また、戴さんと知り合って何年かしてから祖父が日本人に殺害されたことをうかがって、われわれが大きなショックを受けたこともあった。

今年は、前駐外使節九烈士墓に案内して下さった。1942年、フィリピン・マニラで日本に抵抗した中国領事が殺害される事件が起きたがその犠牲者が祀られているのである。しかし、そこには日本の占領時代に「報恩塔」が建てられていたのである。

南京プラスもう一ヶ所の全体的な運営は北京の中国国際友誼促進会が一回目依頼担当してくれているが、促進会の日本語担当の徐明岳さんはこの15回、ずっとお世話になっている。

中国と朝鮮

わたしにとってこのツアーの副産物は、中国内の大韓民国臨時政府を回ることができたことだ。もちろん

中国と朝鮮は関係が深い。ツアコン役のわたしは臨時政府があるところを訪問したときには必ずそこを訪問するようにした。役得である。上海、重慶の臨時政府跡を訪問した。

1932年4月29日、朝鮮の独立運動家・尹奉吉が爆弾を投げつけ、上海派遣軍司令官白川義則大将が死亡、重光葵公使は片脚を失い、野村吉三郎中将は片眼を失った。場所は、上海の虹口公園（現在の魯迅公園）である。現在では、韓国の有力者が記念館を作っており、わたしたちが訪問した時にはそこで朝鮮族の女性が朝鮮語で解説をしていた。韓国人の観光客も増えているとのことだ。昨年ツアーでは、延辺朝鮮族自治州で尹東柱関連の施設を訪問したのも本通信で報告したとおりである。

ことしの南京ともう一ヶ所の訪問は、海南島だった。海南島は中国の南部、ベトナムに近い。大きさは、九州ほどある。わたしの以前のイメージでは済州島ぐらいで、3日もあれば充分だろうと考えていたが、そうではなかった。事前に、海南島近現代史研究会の佐藤正人さん、金静美さんにうかがうと全島の日本軍関連史跡を3日間で回るのは不可能だろうとのことだ。海南島には、北部に海口空港、南部に三亜空港がある。日程の関係で南部の三亜空港に入ってその付近の史跡だけを訪問する計画であったが、初めての海南島、二度と来れないのではないかと、ということで欲張って、海口に入り、海南島の東部を回って三亜に向うことにした。

資源略奪&インドシナ半島を侵略する拠点として、日本軍は海南島を占領している

海南島はリゾート地として知られている。ホームページにも次のようなキャッチコピーがある。

「中国の最南端、ベトナムの東に浮かぶ海南島（日本の九州とほぼ同面積）は、昔から、「海上の真珠」と呼ばれ中国唯一の熱帯のリゾートアイランドとして近年脚光を浴びている人気スポットです。1988年広東省から分離、独立し中国31番目の省、海南省となり、ハワイ諸島とほぼ同緯度にあることから、観光経済特区に指定されて以来、国際級リゾートホテルなどのインフラも整備され、ハワイを凌ぐ世界のリゾート地として熱い期待が寄せられています。」



発だ。みんな親切でわたしたちのためによく働いてくれる。



瓊海市南渡江老鉄橋。日本軍が海南島収奪のために建設した鉄道の鉄橋。2006年の台風で一部崩落、そのままになっている。絵は、メンバーの阪上史子さん。

まず瓊海市の南渡江老鉄橋を訪ねる。日本軍が海南島収奪のために建設した鉄道の鉄橋の一部が残されている。さらに南下して 11 時前に「五百人碑」に到着した。海南島支配を目論む日本軍の共産ゲリラ掃蕩、包囲作戦により大勢の村人が殺害された記念碑だ。場所は、瓊海市博望鎮北岸村。幸存者何君范さんが石碑まで来てくださり、猛暑の中、証言してくださった。何さんの顔には日本軍に切りつけられた傷が今も生々しく残っている。家族が殺害され彼だけが生き残ったという。通訳の姚剛さんは、自身が聞いたこともない残酷な話に言葉を失い、一時通訳不能になってしまった。その空白の部分は、わたしたちが想像するほかない。



証言してくださった何君范さんと「五百人碑」

行程 4 日目の 8 月 15 日 (月) 朝、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館での追悼集会、幸存者の証言集会、紀念館の参観ののち飛行機で海南島・海口空港に向かった。今夏のメンバーは、南京だけを訪問する短期コース 4 名、フルコース 15 名、それに海南島のみ参加の 1 名だった。内大学生特別枠は 2 名。

海口に着いたのは午後 7 時 45 分。南国の海南島は暑いものと覚悟していたが、それほどでもない。中国の三大熱釜(ちなみにあと二つは、重慶と武漢)といわれる南京に比べたら快適だ。ホテルの瓊島泰得大酒店についたのは午後 9 時。翌日早朝からの行動にそなえて静かに？休むことになる。

南渡江老鉄橋から「五百人碑」、旧震洋基地へ

翌 16 日 (火) 朝 8 時に貸切バスで出発だ。中国国際友誼促進会の徐明岳さんの他に海南海外聯誼会陳華常務理事と現地旅行社ガイド(通訳)の姚剛さんと出



五百人碑全景

その後、海軍佐世保鎮守府第8特別陸戦隊司令部があった建物に案内してくれた。現在は跡嘉積中学。校長先生が話をしてくださった。

昼食後、更に南下して猴島（猿島）に向かった。そこには海軍特攻艇「震洋」の格納庫にされた洞窟が残っている。島には船で渡る。有名な観光地であるらしい。遊覧車に分乗して、風光明美な海岸線を走ると、その洞窟があった。震洋は、特攻用のモーターボートで、ベニヤ板でできているものだったという。爆弾をつけて片道のガソリンを積んでボートごと敵につっこむというのである。ここで訓練をさせられていた日本の若者に思いを馳せる。洞窟建設には朝鮮人労働者も動員されたという。



観光船で猿島に渡ります



猴島（猿島）の震洋基地跡。
宮内団長が奥に進んでいきます。



猿島は美しい観光地、大学生枠で参加の大和君です

海南島は北部が亜熱帯、南部が熱帯だ。亜熱帯から熱帯への長いバスの旅だった。夕食をすませて、三亜のホテル・新豪海鮮酒楼三亜宝宏大酒店に着いたのは午後8時だった。そこは海岸べりのステキなホテルでプールもある。ホテルの窓からの景色は、まさにハワイだ。さすが中国で売り出し中の大リゾートである。

八所港、監獄跡も残っていました

17日（水）海南島の3日目である。早朝にフィールドワークに出発だ。天気は曇り。海南島ガイドの姚剛さんに言わせると、曇りというのは海南島ではいい天気だそうだ。なにしろ熱帯なのでカンカン照りの好天より雲が出ている方が快適で過ごしやすいという。



東方市八所港日軍侵瓊死難勞工記念碑



史跡として保存されています。



監獄跡



現在の八所港です

車で約3時間、東にバスを走らせて東方市八所港日軍侵瓊死難勞工記念碑を訪ねた。1964年に建てられたものである。海南島の日本軍により土木工事は中国人、朝鮮人、連合軍捕虜を動員して行われた。この八所でも多くの犠牲者を出しており、「万人抗」の跡地にその記念碑がたっている。築港工事に2万3千人以上の労働者が使われ、工事が終わった時、生き残っていたのはわずか1960人余りだったとのこと。

八所の港は、当時、石碌鉱山の鉄鉱石を日本に運び出すためのもので、日本軍、西松組、日本窒素が、鉱山から海岸まで約50キロの鉄道と港を作ったのである。

次のような証言がある。

「日本軍は村人の家をこわし、その材料で近くの高台に兵舎をつくった。その高台の下にある労働者の宿舎を日本兵が監視していた。宿舎のそばに物品を売る配給所があった。台湾人、朝鮮人、上海から来た人など、たくさんの人が働いていた。宿舎は別々で、配給所も、

朝鮮人の配給所、インド人の配給所など別々になっていた。反抗した労働者は、兵舎近くの土の穴に入れられた。」(林亜政さん、1924年生まれ、紀州鉱山の真実を明らかにする会制作『写真集・日本の海南島侵略と抗日反日闘争』2007.2、文献A)

碑の横に「教育基地」として、当時の監獄が残されていた。小さな窓があるだけの部屋が、いくつかのこされていた。教育基地として保全すると掲示されていたが、再開発が進んでいる地域でもあり、この監獄跡も開発推進グループからは邪魔な建物と見られている。

石原産業・八幡製鉄所・「朝鮮村」



18日(木) 田独にでかけた。田独では、石原産業が日本海軍とともに1939年2月の海南島占領直後から資源調査を始め、1940年7月から田独鉱山の鉱石を八幡製鉄所に送った。

「石原産業は、1934年7月に三重県の紀州鉱山(銅鉱山)を開設し、1939年からそこで1000人を越える朝鮮人を朝鮮から強制連行し働かせた」(紀州鉱山の歴史を明らかにする会制作『写真集・日本の海南島侵略と抗日反日闘争』2007.2=文献A)が、紀州鉱山の真実を明らかにする会がそこから同じ石原産業が海南島でも朝鮮人を強制労働させていたことを突き止め、調査・研究を継続して多くの成果をのこしている。今回の海南島フィールドワークでは、その同会およびその会が母体となって作られた海南島近現代史研究会の研究成果に多くをおっている。

田独の採掘、鉄道工事などに海南島の人々だけでなく、中国本土、香港、台湾、朝鮮から連行された人々が動員された。



(左)「日寇時期受迫害死亡工友記念碑」



「田独万人坑死難坑砒工記念碑」

田独には1948年4月に地域の労働者によって建てられた「日寇時期受迫害死亡工友記念碑」と海南省人民政府と三亜市人民政府が建てた大きな碑「田独万人坑死難坑砒工記念碑」があった。後者の碑には「朝鮮、印度、台湾、香港、及び海南省各市県から連行されてきた労働者がここで虐待され、労働させられて死んだ」と刻まれている。

田独の記念碑から次に「朝鮮村」に向かった。このあたりからほんとうの土砂降りの雨となった。一般的なコースの道路が水没し通ることができなくなったので遠まわりして朝鮮村に向かった。

ここは、黎族りぞくの村で、現在の地名は「三亜市吉陽鎮南丁村委会三羅村」。朝鮮村というのは行政的な名前ではない。当時この地に連行された朝鮮人1000名が殺害されたことを悼んでそのように呼んだとのことだ。



「日寇時期受迫害朝鮮同胞死亡追慕碑」



「朝鮮村」の石碑全景

この事実を知った海南島東方市で農場経営をしている韓国人・徐在弘氏が1999年9月1日に朝鮮語と中国語の2つの石碑「日寇時期受迫害朝鮮同胞死亡追慕碑」を作った。それは、1998年8月31日に放映されたKBS(韓国文化放送)のドキュメンタリー「海南島に埋められた朝鮮人の魂」(金五重監督)を見たことから建立したものだ。このテレビドキュメンタリーの取材時に虐殺現場の一部を発掘し、7体の遺骨を見つけている。その後、取材班は祭祀を行って遺骨を埋め戻している。(紀州鉾山の真実を明らかにする会『海南島で日本は何をしたのか 虐殺・略奪・性奴隷化、抗日反日闘争』2005.5、文献B)

石碑のあるところは「南丁千人坑」がある所だ。三亜市荔枝溝鎮人民政府が2005.1.8付で、朝鮮村の千人坑について、「1942年、日本侵略者は朝鮮および各地から1250人あまりの無辜の青年(その80%朝鮮人)をむりやり連れてきて、道路をつくらせ、燃料を運搬させ、殴打し、飢えさせ、全員を苦しめ、死亡させ、10人あるいは100人ごとにひとつの穴に入れて荒地に集中的に埋めた」という文集を発表している。(同上)

また黎族の符亜輪さん(1916年に朝鮮村近くの黎族の村に生まれ。1945年ころ朝鮮人といっしょに近くの道路建設作業をさせられた)は、紀州鉾山の真実を明らかにする会の調査に以下のように答えている。

「朝鮮人は竹で作ったかごを背負って土を運んだ。朝鮮人は、少ししか食べるものをもらえないので力がなかった。運ぶことができなければ、日本人に殴られた。

道路ができたあと、なんの理由もなく、朝鮮人をふたりずつ、木に吊るして殴った。日本人はいすに座っ

て、朝鮮人に朝鮮人を殴らせて、見物していた。死ぬまで殴って、死んだ後、2、3人ずつ穴に埋めた。朝鮮人に穴を掘らせて、埋めさせた。箱に朝鮮人を入れて運ぶ。最初は、殺した朝鮮人に油をかけて焼いたが、あとは油がなくなって、そのまま埋めた。

朝鮮人はとても多かった。みんな同じ服を着ていた。上着もズボンも青色で、ボタンは白かった。朝鮮人の家は、鉄条網で回りを囲み、日本人が見張っていた。」(文献B、8頁)

「朝鮮報国隊」と海南島

海南島には朝鮮から「朝鮮報国隊」が多く連行され多くの犠牲者をだしている。一般的に「南方派遣報国隊」と言われているものだが、海南島では「朝鮮報国隊」と言われている。

朝鮮報国隊は、海南島で飛行場・港湾・鉄道・道路建設、鉱山労働などに従事させられた。朝鮮総督府が1943年春から、獄中者を選んで組織し海南島に送りだした。田独鉱山でも、朝鮮村でも、八所港にも連行されたのである。

香港から海南島に連行された馬霖さん(1916年生まれ)は、「三亜の中山路で『朝鮮報国隊』と縫いつけた青い服を着ている人たちを何度も見た。20人くらいで、道路の修理をしていた。『カラー』と日本の兵隊がどなっていた。わたしは『朝鮮報国隊』は朝鮮共産党の人たちだと思っていた」と証言している。(文献A、94頁)

1941年に治安維持法違反で3年の実刑判決を受け、1943年3月、朝鮮報国隊として海南島「朝鮮村」に連行され、生還した柳濟敬さん(1917年生)は、「何回か逃亡してつかまった人だった。その人をみなが見る前で、看守が縛って、逆さに天井に引っ張りあげてぶらさげた。ノほんの何分かで死んだ。みなが見ましたよ。引っ張り上げた人間は、看守部長だった。名前は貴島。性格があらくてね。恐怖感を与える。ノ殺された人の名は、金老麻。」と語っている。(文献B、96頁)



(右)海南島はフルーツの宝庫。これがほんとに美味だった

18日は朝鮮村のフィールドワークを終えたのち、最後の目的地・上海に向かった。

そして、上海

翌19日(金)は、魯迅記念館、魯迅故居、そして外灘を初めて対岸の一般的には立ち入れない場所から見学して、上海浦東国際空港、そして関空に戻ってきたのであります。

魯迅記念館は、改装中で、魯迅の作品のいくつかをパネル展示しているだけだったが、それがよかった。大いに刺激を受け、帰国後、ブックオフで魯迅関連の本を6冊も購入した。ただし1850円。高橋和巳が魯迅の翻訳をしていることも恥ずかしながら初めてした。夜な夜な読書に励んでいる?今日この頃である。来年は、どこに行こうか……。



上海・魯迅故居で。魯迅はここで亡くなった。

神戸・南京をむすぶ会『南京・海南島フィールドワークノート2011.8』A4、84頁、560円、同会編『南京・延吉・「尹東柱」・龍井・白頭山フィールドワークの記録2010.8』A4、64頁、500円、『南京・海南島フィールドワークの記録』2011.9、A4、54頁、480円が発売中です。希望者は送料80円を加えた金額を切手でむくげの会までお送りください。

(巻頭の自転車は、南京中華門城壁上のレンタサイクルの筆者です。)

??????

